

スローテンポ通信

第 49 号

2021年9月11日

発行:スローテンポ書店

〒323-0023 小山市中央町3-7-1 ロブレ地階

☎ 0285-32-7211

Eメール usagimokamemo@gmail.com

ブログ『うさぎもかめも』

<http://usagimokamemo.blog.fc2.com/>

◎ 今だからおすすめの2冊！

○ 『笑撃！これが小人プロレスだ』

高部雨市著 現代書館 2009年

☆☆☆☆☆

2021年東京パラリンピックが終わった。メディアは障がい者の活躍を輝かしく報道した。

だが不思議なことに、この舞台で日本の小人(こびと)の活躍が見えなかった。小人レスリングという種目もなかった。陸上、水泳の低身長クラスにわずかな選手を見ただけだった。

小人(こびと)という言葉は禁止されたのか。日本の小人アスリートは、それほど少ないのか。

この本は2009年の出版だが、今の疑問にズバリと応えてくれる。日本は64年の東京五輪以来、徹底して、日本を訪れる外国人の目に、醜い(?)ものが見えないようにしてきたのだ。

○ 『信長』「歴史的人間」とは何か

本郷和人著 トランスビュー 2020年

☆☆☆☆★

自民党総裁選の様子が連日報道されている。候補者や派閥の動きは、まるで戦国末期の覇権争いのような。今は信長没後だ。勝利するのは豊臣派か徳川派か、それとも毛利か伊達か。

著者は、英雄が歴史をつくるのではない。地域や社会に矛盾が現れると、人々に不満が生まれ、人々はそれを解消できる人物を求めると主張する。

英雄待望論や権力者のリーダーシップに依存する考え方には不満が残るが、歴史を見直す新たな視点を提示している。

本屋の本は コンビニの商品と同じではない

独立系の本屋は、コンビニとは違って売りたいものを売る。

かつて八百屋は、いい野菜を客に届け、魚屋は、いい魚を客に提供したように、本屋は客のためになる本を客に提供する。良い本とは、感動したり気付いたり、真実を知ったりする本である。

野菜や魚が、食べてみなければ味がわからないように、本も実際に読んでみなければ、本の良さはわからない。だから、目利きの八百屋や魚屋が、客に指南したように、本屋は客に応じて本を紹介する。

かつて八百屋や魚屋が「これはナマがうまいよ」「これは焼いて食うのがいい」と教えたように、本屋は、読むときの注意や読み方まで指南する。直接本屋まで来れない人のためにも、ブログや通信等で本をすすめたり批判したりもする。

何の感動もなかった名画も、解説文を読んでから改めて見ると、その良さがわかって感動することがある。本にも、うまい解説があれば読み方が変わり、得られるものが大きくなる。独立系の本屋はそう考える。

それに対し、全国展開をする大手書店は、売れ筋だけを並べる。何を売りたいかではなく、売れるものを選んで売っている。書店の評価は、売れ行きで決まる。

大手書店は、「売れるのは、客が求めているからだ。消費者の求めに応じているのだから、何が問題だ?！」と言う。

本離れが進み、このままでは出版文化が消滅してしまうかもしれない。

売上だけで書店の価値を評価するなら、本というものが、大手スーパーやコンビニの商品と同じになってしまう。本が、おにぎりやクッキーなどの商品と違うのは、情報という宝ものが本という形になって詰められている特異な商品だということにある。

しかし、本が単なる情報のパックなら、紙の本ではなく、デジタル媒体の本に代わってもしかたがない。いずれは本がウェブで読めるようになるだろう。紙の本は消滅する運命にある。

しかし本に詰められた情報は、ウェブで氾濫する情報とは違う。軽くて受け入れられやすい情報ばかりではなく、見たくないけど見なければならぬ情報、1回読んだだけでは理解のできない奥深い情報、人生をひっくり返すような斬新な考え方を教えるものなどもある。

これらの重い情報をウェブで読んで、製本された紙の本を読むのと同じように内容を体得できるだろうか。

やがてウェブで育った世代ばかりになれば、紙の本は役割を終える、という人もいる。それを望むのだろうか。次の時代をつくるのは今を生きる人間なのだ。

ウェブの世界では、一つ一つの情報があまりにも軽く扱われる。後で読み返そうと思っても、そのうち忘れてしまう。情報があふれる中で、人々はオトク情報と「いいね」の多い情報ばかりを選ぶ。

人々はオトク情報に敏感になり、オトクに結びつかない情報には関心を失っていく。世間から取り残されないために人気サイトや支持者の多い意見だけに敏感になる。こうして、知らず知らずに消費者の意識はつくられる。

また、ウェブ情報は都合によって、いとも簡単に操作される。「いいね」さえおカネで買えるのだ。

意見の対立があっても、常に力のある側が勝利する。消費者は、牧場で飼いつづらされた羊のように、餌が見える方向に向かっていく。

若者から高齢者まで、本離れが進むのは、そこまで巧みに餌付けされてしまったからである。

本は文化を担っている。いつの時代も歴史は本に記録され、熱い議論は本によって人々に伝えられてきた。世界を左右する議論は、本をとりあげてなされてきた。政策論争は本の出版が舞台であった。

詐欺情報にだまされないためにも、本を読むのがよい。誰が詐欺師で、何が目的か、どうして詐欺がはびこるのかが本を読めば知ることができる。

情報がいとも簡単に操作される時代に、本は「言論の自由の最後のとりで」である。独立系の本屋はそうした本を消費者に届ける。 N



小さな出版社の本があります

スローテンポ書店

小山駅西口 **ロブレ** 地階

消毒や換気などの対策をして、
通常通り営業しております。

どうぞマスクをつけてご来店ください。

オープン: 火~土 13時~19時 (日月祝日休み)

☆ 懇話会

課題解決型で進めます。困りごとと悩みごとをお話してください。参加者たちの知恵とアイデアで解決を目指します。

土曜日 午後3時~5時、参加無料。

☆ 伝わる文章教室

伝えたいことが、きちんと相手に伝わるのが目標です。参加者の作品集があります。木曜日 午後3時~5時。

9月30日は、あつぷる出版社の渡辺弘一郎さんを迎えます。文章と長く格闘してきたプロの意見をうかがう良い機会です。